少人数教育の充実に向けた取組

【　いわき教育事務所　】

学　校　名	いわき市立湯本第一小学校
学年・教科等	全学年・算数科

算数科における少人数のよさを生かした授業改善

取組の内容

1　教員の意識の向上に向けて

○　教育課程編成において、児童の実態を踏まえ習熟度別学習等の位置付けができるようゆとりある時数配分とする。

○　打合せや現職教育などで、少人数教育充実に向けた指導方法等について理解を深める。

○　日頃の授業について、教員同士が互いに話せる雰囲気づくりに努める。

2　授業改善に向けて

○　ペア学習やグループ学習

ねらいが達成できるように、集団の特徴を踏まえて学習を進められるようにする。

・自分の考えを説明したり、友達に質問したり教え合ったりするペア学習では、隣同士や早くできた者同士など柔軟な方法で行うようにしている。

・自分で考え解決した方法を持ちより、互いに説明したり、いろいろな考えを出し合ったり、さらに、よりよい考えを話し合ったりするグループ学習では、グループの構成に配慮するようにしている。

○　Ｔ・Ｔによる学習

担任外教員や管理職などの持ち味を生かし、児童の実態を踏まえ、より細かく幅広く対応できるようにする。

・打合せの時間もなかなかとれないので、授業中でも子どものつまずき等に柔軟に対応するようにしている。

・多様な評価をし指導に生かすために、Ｔ１、Ｔ２の役割を常に固定するのではなく柔軟に行うようにしている。

○　習熟度別学習（学級や学年合同で行う）

ねらいが達成できるように、児童の実態を踏まえ、習熟の程度に応じて学習内容の質・量を調節しながら学習が進められるようにする。

・子どもが学習しやすいように、多目的ホールや他の空間も活用している。

・学年合同で学習が効果的に進められるように、学習の進度や子どもの様子などを学年で交流するようにしている。

3　授業の実際

(1)　知識・技能等の定着に向け「朝の時間」を活用した第５・６学年の実践例

【方法】

＜１巡目＞～各教室にて～

①　２年生の復習から、プリントにそって自分のペースで問題を解く。次に、自分で答え合わせをし、間違った所は直す。

②　“各学年で身に付けたい力”の表に、チェックをする。

③　①②をくり返し、「分かっていること、分からないこと」を明らかにしながら次の学年へと学習を進める。

＜２巡目以降＞～各教室・多目的ホールにて～

①　分からないこと（チェックのない内容）については、補充問題に取組む。また、多目的ホールには“お助けコーナー”を設け、担任外の教員が指導に当たる。

②　ほぼチェックできた子どもは、自分のペースでどんどん発展問題へと学習を進める。各教室での指導は、主に担任が当たるようにする。

(2)　習熟度別に授業展開を工夫した第３学年の学年合同で学習を進めた実践例
【単元名】　かけ算の筆算(2)
【目　標】　図や式を用いて、２位数×２位数の計算の仕方を考えて説明することができる。（３／１１）
【方　法】
①　導入は学年全体で行い、問題から本時のめあてをつかむ。
②　問題の解決にあたり、「解けそうだ！難しいな！」等自力解決への見通しからクラスを選択できるようにする。
③　自力解決や練り上げについては、解決の方法や発表の仕方等を工夫し、それぞれのクラスで学習を進める。
・下位→テープ図等半具体物をもとに計算の仕方を考えて解決する。
・中位→自分なりの方法で解決し、それぞれの考えを説明し練り上げる。
・上位→自分なりの考えを説明し練り上げ、適用問題に取組む。
④　終末までの時間については、本時のねらいが達成できるようにそれぞれのクラスに応じて自力解決や練り上げ、定着などが進められるように配分する。

(3)　単元末に習熟度別学習に取組んだ第５学年合同の実践例
【単元名】　小数のわり算を考えよう
【目　標】　学習内容の定着を確認し、理解を確実にすることができる。
（１２，１３，１４／１４）
【方　法】
①　小数のわり算の筆算が理解できているかどうかでクラスを分けて授業を進めることを知らせ、どのクラスにするかを子ども自身に選択させるようにする。
②　習熟の程度に応じて、問題の質や量を工夫する。
・下位→基本的な知識・技能の習熟、定着をねらいとした問題。
くり返し学習を基本とする。
・中位→基本的な問題に加え、思考力や表現力に関わる問題。
自分のペースに合わせて進める。
・上位→学習内容を適用し、思考力や表現力に関わる問題を中心とする。また、進んだ子どもには自由課題にチャレンジさせるようにする。

③　クラスは上位・中位・下位の３クラス、指導者は担任と担任外の４人で取組む。また、子ども自身が選んだクラスを固定せずに習熟の程度によって次時に移動することも可とし、学習意欲が継続するよう配慮する。

成果と課題

1　成果
○　教員の少人数教育に対しての意識が高まり、個人差に応じた指導方法の工夫が見られた。
○　一人一人の習熟度やペースに応じて行う補充・発展的な学習については、学年合同で行うことが多く、担任だけでなく様々な教員に関わってもらえることもあり、児童の学習意欲が向上してきた。
○　学年合同での習熟度別学習により、学年全体の子どもたちの学習状況を的確に把握し、個々の児童の理解の度合を確かめながら学習指導を進めることができている。

2　課題
○　単元テストなど直後に実施するテストの数値には向上がみられるが、ＮＲＴや全国学力調査等の数値の向上にはまだ現れていない。確実に定着できるまで繰り返しの学習や学び直しの学習、それらを活かす学習等、計画的に指導の工夫が必要である。
○　「わかった！できた！もっとやりたい！」という学習意欲の高まりを、自主的な家庭学習やテスト等の数値の向上につなげ、児童自身が学習の楽しさや充実感を実感できるよう、指導の工夫が必要である。